

アイデンティティから、複合性、関係性、流動性に注目して主体の再構築と再交渉を読み取るうとしている。

パネルの主旨とまとめ

黒 木 雅 子

本パネルで取り上げる「ジェンダー宗教学」は、社会の周縁に位置する女性の声に耳を傾けること、男性中心主義と西洋中心主義の解釈に疑義を呈する批判的な視点をもつこと、そして女性のみに限らず性的マイノリティなどの弱者の視点を重視することを目指し、宗教を包括的に論じようとするものである。

ジェンダーは単なる社会、文化的に形作られた性差という意味にとどまらず、現実の不公平や不均衡を顕在化し権力関係を示す視角である。宗教は「ジェンダー」を形作り、人間を超えた存在の名の下にそれを権威づけしてきた。「ジェンダー宗教学」は、世界宗教の家父長制的な性質を批判してきたフェミニズムの長い歴史に基づき、宗教が女性や少数者への不当な価値観や社会構造の形成に加担してきたことを明らかにすると同時に、そうしたフェミニズムのアプローチが西洋中心主義的啓蒙主義や植民地主義に関わっていたという問題点をも検証する。本来、性別や人種や性的指向などにとらわれない「普遍的」の教えを説くはずの仏教やキリスト教から排除されてきた人々に対して、宗教研究はどう向き合う事が出来るかを問うことに

なるだろう。

ヨーロッパで活躍する「宗教とジェンダー」研究者の一人 U・キングは、ジェンダーの視点を積極的に活用することなしには、「どのような宗教もはや正しく記述、分析、説明されない」と主張している (King, 2004)。もしジェンダーが社会の中の性差にまつわる非対称性をあきらかにするのであれば、人間の平等な尊厳と解放を目指す宗教という事象の研究にジェンダーの視点が欠落していることこそが、そもそも不適切である。宗教とは本来的に、暴力や抑圧を正当化するのではなく、社会的弱者の置かれた状況を是正し、すべての存在の自由と価値と尊厳を主張し、これらを実現するべきものである（『ジェンダーで学ぶ宗教学』田中・川橋編、世界思想社、二〇〇七年）。ジェンダーの視点を通して宗教、および宗教研究を見直すことは、宗教を伝統や後進性と、他方フェミニズムを近代や世俗性と結びつけるような二項対立的枠組みを問い直すことでもある。この作業を通じ、宗教的实践を見つめなおす機会を提供することにもなる。ジェンダーの問題は宗教の中に遍在している。それが複雑で多層的であるからこそ、多くの人によるさまざまな視点からの議論が求められている。ジェンダーは、これからの宗教研究にとって、ますます重要な視座となるだろう。

本パネルは、そうした問題提起のひとつとして、従来の宗教学では十分な議論を行ってこなかった宗教研究者の姿勢を問題にしつつ、日本、韓国、エジプト、アジア系アメリカ人という非西洋の女性たちを対象に、これまでの宗教研究に内在する偏

パネル

向の問い直しを試みた。

コメンテータを含めた当日の質疑応答では、脱ジェンダー化が必要かどうか、ポジショナリテイの複合性、ポジショナリテイを問われない権力側の無意識さ、男性のジェンダー的視点の欠如、男性によるジェンダー研究不足などをめぐって意見が飛び交った。

このパネルの目的はジェンダーの視点を特権化するものではないが、日本の宗教研究の現状では、この視点をいまだ強調しすぎて強調しすぎることはないのではないだろうか。

教祖伝の脱構築

代表者 幡鎌 一弘

コメンテータ・司会 堀内みどり

記憶・ナラティブ・教祖伝

宮 本 要 太 郎

教祖伝を構成する個々の出来事は、出来事として切り取られ、解釈され、再構成されることを通じて、初めて「出来事」として知覚される。また、エピソードを伝える人びとの記憶は、教祖伝という解釈の様式において表現されることによって共有されうる記憶、すなわち「記憶」となる。重要なのは、「出来事」と「記憶」の間の循環関係である。教祖伝は「教祖」(を構成するさまざまな出来事)を記憶するために叙述される。しかしいったん教祖伝が成立すると、それは出来事の解釈という行為を要求する。記憶された出来事(すなわち教祖伝を構成する一連のエピソード)と、出来事によって(再)解釈を促される記憶(エピソードの意味を探索すること)とは、教祖伝において循環しながら相互に補足し合いつつ、教祖についての一連のイメージを構成する(すなわち教祖像を形象化する)。

この解釈学的循環においては、個々の出来事についての記憶が時間軸にそって構成されることによって、教祖伝の構築という新たな出来事が生じ、さらにその教祖伝が受容されること